特別寄稿　連載二回（一回目）

大正十二年のアンケート
～五〇年後への警鐘～

北村　猪之助

今から96年前の大正12年当時、小樽の大店であり、色内6丁目（現色内1丁目）に店舗を構えていた㈱梅屋商店が創業50年を迎えて、「梅屋商店開業五拾周年記念誌」を発行した。私は、ふとした機会からこの本を見る事になった。読んだ記事のうち、最も記憶に残っていることを紹介する。

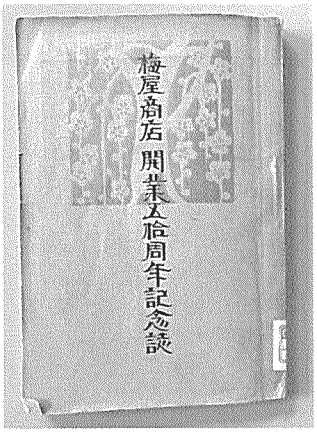
この本は、頁数が343頁、広告240余件、一商店の記念誌としては異例の頁数であろう。筆を執った人は、店内は別として80名に及んでいる。発行の中心は㈱梅屋商店店主の村住三右衛門（当時70歳）発行兼編集人、島野一二（梅屋商店より独立し、後に小樽市議会議長となる）である。貴重な記事が沢山あり、梅屋商店の事に限らず、当時の小樽を知る上でも大変得難い記事もある。その中で、梅屋商店が関係先に三つの質問をした。今で言うアンケートである。

三つの質問
一、貴殿の体験せられたご教訓
二、五十年後の小樽を如何に想像なさいますか
三、北海道樺太に於いて最も必要とお認めなさる施設

この三つの回答それぞれに興味があるが、今回は質問第二を取り上げたい。この質問は、どのような基準で問い合わせ先を決めたか、また、何名に問うたかは分からないが、回答は十一名から寄せられている。この当時の小樽は、運河が出来たのが、大正12年で第一回の国勢調査が大正9年、この時の人口108，113人、今の小樽とほぼ同じくらいである。この人口構成は60歳以上4・5％、15歳から59歳までが60％、14歳以下が35・5％である。今と全く異なる人口構成で、行政区域は厩崎から平磯岬まで、この中に10万人が住んでいたから人口密度は今と比べものにならない。人口の半数以上が生産人口（即消費人口）だから当然、市勢は盛んであった。これを前提に考えるとその回答は、威勢の良いものと容易に予測される。回答は大体においてその通りである。

だが、それと異なる意見の人が二人いるのである。先ずは、共通している九人の意見であるが、「港は手狭

梅屋三右衛門



梅屋商店記念誌

となり相当沖合より新防波堤が出来、港の水面は拡大し船の往来は愈々輻輳をするであろう。小樽、札幌は電車になり、人口30万～40万、花園公園は削られ平らになり住宅地となっている。（中には、地価坪単価まで予測している人もいた）下水道も道路も整備され、今のような泥田の如き道路は夢の時代と過ぎている」要するに人口は、大幅に増加し生活環境は整い、港は整備され大小樽となっているということである。これが九人の公約数的意見である。

では、異なる二人の内、その一人、板谷順助さんの意見（原文のまま）は、「五十年後の小樽を想像せよとは無理なご注文です。従来のように本道の生産物の7割が小樽に集散されるなどといつまでも夢見るような時代は追々過ぎ去ると思います。故、今後の小樽発展は小樽市民の非常な努力に待たなければなりません。私は小樽の将来に対し人口25万程度に達すれば都会生活として幸福だと思っております」と回答している。この回答には何故か、偶然か意識的か国、道、市という官についての言葉がない。要するに小樽市民自体が非常な努力をしないと小樽は良くならないよ。自分達で考え自分たちで行動しよう。そうでなければ小樽の未来は開けないぞ。ということなのだろうか？

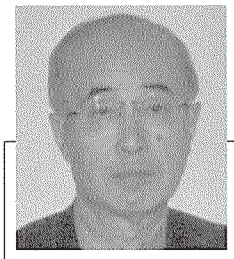
二人目は、下手宮組　井上進さんであるが、回答が長文なので要点を記すと「小樽の将来は今日の優越権を長く維持せんことは不可能なことに属す。室蘭と釧路との激烈な競争を覚悟しないとならない。室蘭は地の利が良く、釧路は外国関係では小樽に勝る。小樽市たるもの港湾の整備を今のごとく不完全な設計のもとに遂行して得たりとなし、太平の甘夢にひたる事あらば意外な大敵に遭遇すべし。海陸連絡は設備の方法夫れ自身が目的に非ず。中継費の節約が終極の目的にして連絡設備はその手段たるを知らば市民たるもの大なる反省を要す。畢境小樽の将来は海上にあり、海波を望んで三思して可なり」とある。要するに室蘭は内航的に見た時、釧路は外航的に見た時、その場合、国道の環境が整えば一変して強敵と化すであろうと言うことである。

小樽の盛んなる時代に敢えて警鐘を鳴らすお二方の見識はどこから来たものであろうか。板谷順助さんがこの回答の中で何故、官に触れなかったか、何故、小樽の人口は25万人で良いと喝破したのか、井上進さんには意外な大敵とは何を想定していたのか、新港の出現を予期したのか、故人となったお二人には聞く術もないが、正に「海波を望んで三思すべしであろう」。しかし、お二人は色々な情報分析と日頃の考えからこのように思い至ったのであろう。

では何故、三右衛門翁は小樽で商売を始めたのだろう。この記念誌の冒頭、三右衛門翁のご挨拶の中に翁が何故小樽に着目したかについて述べているが参考までにその一節を原文のまま記す。翁が故郷加賀の一漁村にあって青雲の志を抱き色々な情報を集めていたことが分かる。

西蝦夷地を踏査しました近藤重蔵重守が、その建策書の一節に「高島小樽内間にテミヤと云う西蝦夷地第一の良港あり、地味肥沃にして近山良材多く麻茂り麦、稗実る、若し一度此の地を衛所と定め、土地を開放し、漁夫等に自由の移住を許さば必ずや和人来聚し船舶輻輳して忽ち殷賑を来すべし。現に大船二十二隻冬囲いをし、二百数十人同所において越年したる為、高島移住を出願したる商人多数に及ぶ。宜しく速やかに陣所を設け当座の利便を図りなば同地の如き実に和人移住の最適地なり」とある。小樽は予測通り発展した。この事を知った翁は小樽で商売することを決心したのだろうか。どのようにして重蔵の建策書を知り得たか、これもまた興味深い。いずれにしても当時と今では、そのことの判断基準において、情報量も比較にならないし、その正確さも比べるべくもない。情報の新鮮さにおいては、言わずもがなである。

情報入手の手段も今より数段困難であっただろうが、真剣に勉強すれば前述の三人のように先が見えるのだろうか。郷土のこの三先達を手本とし、我々も努力したい。



北村　猪之助氏
小樽船用品㈱
代表取締役会長

昭和10年1月24日生まれ。
小樽市南浜町にあった北村船具店の長男として誕生（現在のホテルソニア出抜小路側）。
昭和16年稲穂国民学校では、故石原裕次郎と机を並べる。親子二代で色内港町町内会長を務めている。元小樽商工会議所議員。